# 『新版 質的研究入門　＜人間の科学＞のための方法論』

ウヴェ・フリック著　小田 博志 監訳　春秋社（2011 年）

## 第 6 章　理論的立場　/　第 7 章　認識論的背景：テクストの構築と理解（pp.67-103）

### 第 6 章　理論的立場（pp.67-88）

#### 質的研究のさまざまな視覚（p.67-p.68, l.10）

- 「質的研究」の三つの基本的な前提
  (1) 象徴的相互行為論の流れは個々人の主観的な意味づけを探ることができる
  (2) エスノメソドロジーは日常のありふれた行為とその産物に関心を向ける
  (3) 構造主義もしくは精神分析的立場はまず目を向けるのは、心理的社会的な無意識の過程である

#### 主観的意味：象徴的相互行為論（p.68, l.11-p.71, l.14）

- この立場に立って実証研究を行うときに焦点が当てられるのは、個人が自分の行為や取り巻く環境に与える主観的な意味である

基本的前提（p.69, l.2-p.70, l.5）

- ブルーマーによる象徴的相互行為論の「三つの簡単な前提」（Blumer 1969:2）
  ①　「人間はものごとが自分にとってもつ意味に応じて行為する」
  ②　「そのものごとの意味は、当人と他の人々との間で行われる社会的相互行為から生じる」
  ③　「それらの意味はものごとを処理する解釈過程の中で取り扱われ、修正される」
- 以上の前提から、事物や出来事、経験などに対する個々人のさまざまな意味付与の仕方に重点を置いた研究の方向性が出てくる
- 主観的な意味付与の視点を再構成することが象徴的相互行為論的に社会を分析するときのポイントとなる
  「人がある状況をリアルだと定義するとき、その状況はリアルである、というのがトマスの定理である。この定理は、象徴的相互行為論の方法論的原則と直接繋がっている。その原則では、研究者は自分が研究している人々の視点から世界を見なければならない。」（Stryker 1976:259）
- 主観的なものの見方（Bergold and Flic 1987）のさまざまな側面
  ・主観的理論：人々が世界全体（あるいは世界の一部としてある対象領域）を自分自身のために説明する上で用いる
  ・自伝的なナラティブの形式：主観的な視点から再構成された人生の軌跡など。

社会学における近年の発展：解釈的相互行為論（p.70, l.6-16）

- デンジンの象徴的相互行為論から出発した、さまざまな理論や新しい流れを統合する議論
- 解釈的相互行為論（Denzin 1989a: 10）
  1. 「個人的な問題（例えば妻に対する暴力やアルコール依存症など）と、そうした問題に対処するために作られた公共施策、制度との関係を調べたい時のみに用いられるべき」
  2. 研究対象のプロセスは、バイオグラフィーの文脈において理解され、この観点から解釈される必要がある

心理学における近年の発展：主観的理論という研究プログラム（p.70, l.17-p.71, l.14）

- 象徴的相互行為論は、主観的理論に焦点を当てる研究プログラムにおいて最も一貫して実践されてきた（Flick 1993; Groeben 1990）
- ここでの出発点は、人々は日常生活において世界や自分たちの行為がどのように作用しているかに関する理論についてを（科学者のように）構築している、というものである

→特殊なインタビューの方法や、被調査者とのコミュニケーションを通して理論の妥当性を検証するという特殊な方法の考案

## 社会的現実（リアリティ）の形成：エスノメソドロジー（p.71, l.15-p.74, l.23）

- ここで問われるのは、相互行為の過程の中で、また相互行為の過程によって、人々はいかにして社会的現実を作り出すのかということである
- 研究上の焦点は、日常生活の中でメンバーが現実を作り出す方法に当てられる。
『エスノメソドロジー的な研究は日常行為を、メンバーが「明らかに合理的で、あらゆる実践の目的に報告可能な」ものとする、つまりありふれた日常活動の組織化として「説明可能」にする方法として分析する』（Garfinkel 1967:vii）
- 日常的な行為やその遂行、さらにそうした行為が遂行されるローカルな文脈の構成に関心を向けることがエスノメソドロジー的研究の一般的特徴

### 基本的前提（p.72, l.5- p.73, l.14）

- エスノメソドロジー並びに会話分析の基本的前提（Heritage 1985: 1）
  （１） 相互行為は構造的に組織化されている
  （２） 相互行為の構成因子は文脈によって作られ、また文脈を更新する
  （３） したがって、この２つの特性は相互行為の細部に宿っており、このために会話のやり取りの中のどんな些細なことも、前もって無秩序だとか、偶然のものだとか、関係ないなどとみなして除外することができない
- この基本的前提で肝要な点は、相互行為は秩序ある仕方で形成されるということであり、その相互行為の文脈は、それが営まれる外枠であると同時に、相互行為によって作り出されるということである
- ここでの焦点は、主観的意味にではなく、いかにその相互行為が組織化されているかという点に当てられる
- エスノメソドロジー研究で取り上げられるのは、得意な出来事よりも日常生活におけるルーティーンである
- 相互行為が組織化される方法を明らかにするために、研究者は自分が前もって有している見方や、相互行為の当事者の視点からも距離を取ろうとする
- エスノメソドロジーの視角からは、相互行為が生じるいかなる場面でも文脈が鍵となる

### 社会科学におけるエスノメソドロジーの近年の発展：ワークの研究（p.73, l.15-l.28）

- ワークの過程とはこの場合広い意味で使われ、特に実験室で科学者が行う作業や、数学者による証明の行い方が研究の対象となっている
- 研究の焦点は相互行為的実践から、そのような実践の中やその結果においてモノとして現れてくる「具体化された知」にまで広げられている→科学的知識の社会学的な研究

### 心理学における近年の発展：ディスコース心理学（p.74, l.1-23）

- ある特定のトピックに関連する談話を分析することで、認知や記憶といった心理学的現象が研究される
- ディスコース分析の出発点は「解釈のレパートリー」の分析
  「解釈のレパートリーとは、多くの場合メタファーや生き生きとしたイメージを中心にまとまっている、概念、描写、言い回しなどの集合体で、広く流布しており、明確に識別可能なものである。それらは行為、自己、社会構造などに関する色々なバージョンを会話の中で作るのに用いられるブロックのようなものと考えられる」（Potter and Wetherell 1998: 146-147）

- 多くのエスノメソドロジーの分析では、いかに社会的相互行為が組織化されるかが驚くほど精密に描写されている
- この反面、当事者の主観的な意味づけや、特定の文化のような既存の文脈が、社会的行為の構築に果たす役割にはさほど関心を払わない

## 社会的・主観的現実（リアリティ）の文化的枠づけ：構造主義的モデル（p.74, l.24-p.77, l.13）

### 基本的原則（p.75, l.1-p.76, l.8）

- 経験及び行為の表層と、行為の深層構造とが区別される
- 表層は当事者の主観を通して接近可能だが、深層構造は日常の個人的省察によって近づくことができない
- 深層構造にあるものとして、文化的モデル、解釈パターンと意味の潜在的構造、精神分析的な無意識にとどまり続ける潜在構造が想定される
- 「無意識の社会的産出」がいかに行われるかを発見しようとする
  →代表的なアプローチ：「客観的解釈学」
  「相互行為のテクストは客観的な意味構造を構成する。ここで言う客観的な意味構造は、相互行為それ自体の潜在的な構造に相当する。これらの相互行為のテクストの客観的な意味構造は、客観的な社会構造一般の原型にあたり、ある相互行為に関与する主体の側で思い描くその相互行為の意味からは分析上は独立した現実として存在している（実証的に知覚できないかもしれないが」（Oevermann et al. 1979:379）
- 客観的解釈学の理論的基礎の問題
  ・行為する主体と、分析で明らかにされる構造とのつながりが不明確である点
  ・テクストと世界を同一視している点
  ・十分に分析すれば研究対象の行為を生み出している構造に自ずと至るだろうという楽観

### 社会科学における近年の発展：ポスト構造主義（p.76, l.9-l.23）

- デリダ以降：構造主義的前提の疑問視
  ex)解釈の対象として作成されたテクストや、解釈の結果として生み出されたテクストが、解釈者の利害関心だけでなく、調査の対象となる人々の利害関心にも左右されるのではないか
- テクストは世界そのものでも、世界の部分を客観的に表象するものでもなく、むしろそれを作成した人々と、さらにそれを読む人々の利害関心の産物である

### 心理学における近年の発展：社会的表象論（p.76, l.24-p.77, l.13）

- 社会的・文化的に共有された知が個人の知覚、経験、行為の仕方にいかに影響を与えるのか
- 「社会的表象とは、二重の機能を持った価値、観念、実践のシステムである。一つ目の機能は、人びとが物質的、社会的世界の中で方向づけを得たり、世界を把握したりすることを可能にするような秩序の形成である。２番目の機能は、彼らが社会的に交流するためのコードや、彼らの生きる世界や個人的・集団的歴史の諸側面を明確に命名・分類したりするためのコードを提供して、共同体の成員間のコミュニケーションを可能にすることである」（Moscovici 1973:vii）

## パラダイムの競合か、トライアンギュレーションか（p.77, l.14-p.78）

- これまでに述べた、３つの研究視角以外の方法
  →特定の理論的立場やその立場からの視角を絶対視して、他の立場を排除してしまうやり方
  →視角のトライアンギュレーション：異なった視角の組み合わせ

## 異なる立場に共通する特徴（p.79, l.1-p.81, l.6）

- 認識論的原則としての理解
  ：質的研究では研究される現象や出来事を、その内側から理解することを目指す
- 出発点としての事例再構成
  ：比較や一般化をする前に、個々の事例をある程度の一貫性を持って再構成する
- 基礎としての現実（リアリティ）の構築
  ：研究される現実とは所与の現実ではなく、様々な「アクター」によって構築された現実である
- 実証資料としてのテクスト
  ：テクストが再構成と解釈の基礎になる

フェミニズムとジェンダー研究（p.81, l.7-p.82）

- フェミニスト研究は質的研究を批判的に振り返ることに貢献してきた
- ジェンダー研究の枠でより質的研究が活発になっている

実証主義と構築主義（p.83-p.86）

- 実証主義
  ：現象主義・演繹主義・帰納主義・科学は価値自由のやり方で実践されなければならない・科学的言明と規範的言明の区別

- 構築主義（構成主義）
  ：認識、知覚、知識は構築物である・科学的事実は社会的構築物である
  ：知とは経験を組織化するものだと言える

## 第７章　認識論的背景：テクストの構築と理解（pp.89-103）

テクストと現実（リアリティ）（p.90, l.2-l.3）

- テクストの３つの役割
  (1) 研究結果の根本となる本質的データ
  (2) 解釈の基盤
  (3) 研究結果を提示し伝達するための主要媒体

- 質的研究がテクストから切り離せない関係にある→２つの問題点
  ① 現実をテクストに翻訳するとき何が起こるのだろうか
  ② テクストを現実に再翻訳する時、つまりテクストから現実を推論する時何が起こるのだろうか

世界制作としてのテクスト：一次と二次の構築（p.91, l.4-p.92, l.9）

- 「表象の危機」：テクストと現実との関係は、既存の事実とそのコピーとしての表象との関係には還元できないということ
- 表象と正統性の二重の危機
- 「今日では経験とは、実は研究者が書く社会的性質を持ったテクストの中で作り出されるものとみなされている。この事態を表象の危機という。経験とテクストとが直接につながっているという見解が疑われているのである」（Denzin and Lincoln 2000b:17）
- 社会構築/構成主義者：社会の中の当事者は何をリアルだとみなしているのか、またいかにそうしているのか。また“リアルだとみなすこと”が成立する条件は何か。観察者の視点からはどのような条件下で生じるのか。そして、いかなる条件下で観察者は、彼らが観察したものをリアルだとみなすのか。
- 研究の出発点は我々がフィールドである社会的出来事、事物、事実に関する観念であり、これら観念相互の関わり方だと言うことになる

出発点としての社会的構築（p.92, l.10-p.94, l.3）

- 事実は選択と解釈を通してはじめて事実となる（Schutz 1962:5）
  「厳密に言うと、純粋な事実というものはどこにも存在しない。どの事実も全体的な文脈の中から我々が精神活動によって選択した事実である。つまり、事実は常に解釈の加えられた事実なのである。」
- 一次と二次の区別が重要（シュッツ）
  「社会科学で構築されるものはいわば二次的に構築されるものであって、社会状況において行為者が構築したものに関する構築なのである」

テクストの中の世界制作：ミメーシス（p.94, l.4-p.97, l.24）

- ミメーシス＝世界を象徴的世界へと変換すること
- 質的研究におけるミメーシスの要素
  ・研究参加者の側で、経験を口頭の語りや報告などに変換する際に
  ・これに基づいて研究者がテクストを構成し、それを解釈する際に
  そのような解釈が日常の文脈に還元される（例えば書かれた研究結果が読まれる）際に

ミメーシス１
- 「人間の行為とその意味、象徴性、時間制に関する先行理解のことである」（Ricoeur 1981:20）

ミメーシス２
- 社会的・自然的世界の経験がテクストへと「加工される」変換作業であり、一つの構成プロセスとして理解されるべきもの
- この場合のテクストは、日常生活で他人に語られる話のこともあれば、ある種の記録や研究目的で作成されるテクストのことでもある

ミメーシス３
- テクストを理解することは、解釈のプロセスを通して行われるミメーシス的変換である

- ミメーシス的プロセスを経験の構築と解釈の相互作用として捉えることができる

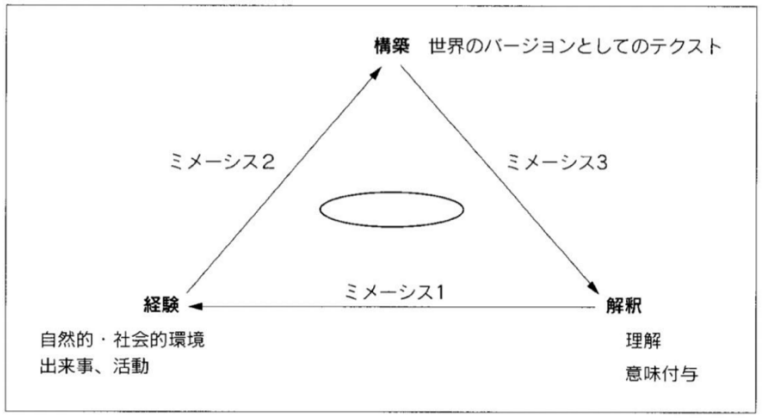

図 7.2　ミメーシスのプロセス

（p.98 より）

バイオグラフィーとナラティブとの関係におけるミメーシス（p.97, l.25-p.101）

- 自分のバイオグラフィーについての語りは単なる事実経過のコピー/表象ではないと言うこと
- 質的研究での研究対象は、すでに日常生活の中で構築されたものである。つまりそうやってすでに構築されたものを質的研究は再びナラティブの形式で研究しようとする
- ミメーシスは「表象」概念の問題を避けることができる→事象を様々なレベルで常に表現/提示されたものとみなすことで、社会科学の中でも使用可能である